浮世絵の美 その三十六

日本文書家教会会員
各務章

前回に続けて渓斎英泉の「枕文庫」について、興味のある項目を紹介しよう。英泉は寛政三年（一七九一）に生まれ、嘉永元年（一八四八）に五十八歳で亡くなっている。今から約二〇〇年前に性教育の詳細な手引書を書いたのだから、この道の勉強家だったと敬服している。

前回述べたように、単なる興味本位の著作ではなく、医学的にも或る程度正確な記述があるので、印度、中国の性書を調査したり、江戸時代の医師達の所見を引用したりしたのではないだろうか。勿論自己の体験もある。

江戸庶民が秘かに愛読していて、売り切れる度に版を重ねて販売したと言うから立派である。

さて、私はここに一体の玉茎(男性器)の置物をもっている。高さ二十五センチ、横幅約十センチの大型の飾り物である。杉材を円形に削って、淡い黒色に塗ったものである。

村落の辺に建っている陰陽石と同じ種類のものである。裏側に「道祖神」との文字がある。神棚に祀ってもよいのではと思われるように、注連縄で亀頭を巻き注連飾りのように前にさがりをつけていて、何となく微笑ましくも立派な物である。東北の友人が送ってくれたので、向こうでの特別製なのかも知れない。時々取り出しては、庶民の願いであった巨根願望、或いは子宝を授かるための信仰に基づく物ではなかっただろうかと推測している。決していやらしい感じの土産物ではないのである（右頁参照）。

本題に入ろう。英泉の「枕文庫」の最初の項目はやはり「陽茎」の伝」である。

「おそ玉茎に品類多し、大男根、小男根、黒、白、上反、下反、長陽根、かはかぶり、傘まら、うつぼ玉茎など。黒の上反をもって上品となす。白下反は下品なり。長きは肝の臓にあたる故、婦人是を嫌ふ。皮かぶりは中品なり、情をいだして玉門を出入はこぶといへども我皮のうちにて婦人の肌につかず悦びうすし、傘とは雁高の甚だしきを言ふ。茸の開きたるが如く宜しからず、女に害あり、上品とせず、うつぼは皮かむりの甚だしき也。きざすといへども出入往来のうちに再び皮をかぶる故に下品とすと云ふ。」

右に述べているように、男性の一物を詳細に名称から説明しているのも珍しいではないか。但し、その実物を見ていないので、多分そうであろうと推測しながら、自己の所有物は、どの部類に属するのだろうか、と少々心配にもなってくる。ここが又性教育の手引きとして興味をそそる所でもある。

次にこうも述べている。

従来巨根を婦人皆之を喜ぶという通説について、そうでない者のためにも力を落とさないような配慮もあってか、説明がよろしい。

「世に大まらと小まらを論ず、何れが良きかと、婦人答えて曰く、うまき物にても大口に食してこうみありや、小口に食してうまきを知るべしと、この説も可なり」としている。

どんなにおいしい食物でも口いっぱいに頬張っては、そのよい味は判らない。と同様に巨根をせいいっぱい押し込まれては快感どころではない。また長すぎると肝臓に当たるので婦人は之を嫌う。だから巨根であれば良いという通説を打破した立派な見解だ、としているのである。

旦那が巨根で痛くてたまらず、離婚してもらうつもりで鎌倉松が岡の尼寺東慶寺（縁切寺として有名）にかけ込んだが、その離婚の理由を聞かれ困ってしまった。それを皮

肉って「大きいと言い兼ねている松が岡」という古川柳がある。川柳もその背景を知らなければ面白味が全く判らない。ここにも江戸時代の庶民の生活を勉強する必要がある。浮世絵を通して知る世相の一端であろう。

英泉は性教育の手引きらしく、絵でもって内容を説明している。ここには掲載できないが「男根の最上紫衣上性の図」というのがある。

太く逞しく勃起した男性器を示し、雁(亀頭)が良く発達し、血管怒張し、赤紫色をしているのが最上(上品)としている。ちなみに上・中・下品と言うのは、そのものが上等の出来である。と言う解釈で説明しているのである。「源氏物語」でも「雨夜の品定め」の段で、女の顔や姿を品定めするのに、この上品という言葉を使っている。俗に私達が日頃使っている。品がよい。下品な人だ。上品な言葉遣い、等

又物の豊勝
新天町

があるのも元をただせば、ここからきているのであろう。

さて性の手引書はまだ続く。男根の長さについてである。大きさには長さと太さであるが、やはり長さに関心が高い。上・中・下の長さは、上が一五・八㌢、中が一三・二㌢、下が一二・五㌢としている。細かいようだが、昔の寸をメートル法に換算しての説明である。田野辺氏によれば、米国のディッキンソン教授の著書(人体性解剖図説)でみると、九人の学者の資料をもとに平均値として、弛緩した状態で長さ一〇㌢、直径三㌢。勃起した場合は長さ一五㌢、直径四㌢と報告。これは米国人の場合だから日本人では、医学者の報告で白人に比して日本人の場合、二〜三㌢短いとの事とあるので、

一応の長さが判るのではないか。読者のものは如何であろうか。

浮世絵の場合、大く長いように描いているのが特徴だから、現代人のものより、立派だったと、心配したり、落ち込む必要はない、と言うことがお判りであろう。めでたしくである。

男性の次に女性が出てくるのが当然であろう。「陰門之伝」が詳しく説明されている。

この項目について形態の説明は女性の品位のために省略しておきたい。

但し男女の交合の中で、男を喜ばせ、又自らも絶頂に達するという項目について、英泉がどう述べているか、次にあげておく。

「男を鳴かせる女といふは、せい中にして丸顔、色白く、肌こまか、目細く、手足うつくしく、足の大指上へ反り、ものごしやさしきはかならず上開なり。又せいたかく色白く顔面長、生えぎわ薄く、口もとじんじょうにして、肉つきすこしふとりてさくら色なるは上開なり」(左図参照)。

こんな風に細かく分析しているが、果たして全部を備えた女性がいるとは限らない。英泉の願望が表現されているのであろうか。或いは自己の実体験の中で、これらのいくつかの特徴が見えかくれしたのかも知れない。しかし相当にくわしいので実に面白い。

次に、どうしたら女性を喜ばせることができるか、男性への教えである。

「交合するに泣かせるには口をすひ、さて此方の片股をはさませて、志と志と咄し、一時もすぎ半分入るれバ、其時女は絶かね、其まま気をやる、此かたひかへてぬぐいぬぐい女のきざすまでまち、一物を志か志かとくハえて引時分に一度に気をやるべし、十人に九人までは泣者としるべし」

この順序を男性が自分の快感を押さえながらやれるかどうか、疑わしいが、之も願望か。

「玉門の形、饅頭を二ツ合わせたるごとくに、むつちりとぐるり高みして、肉の赤ミ桃色にて空われ長く、吉舌みじかく、ふとく、毛すくなくやわらかなるを淫門の最上とす」

英泉は之を大きく描いているので、なるほど、と理解できるし、絵師だから色の具体的表現も正しいのであろう。しかし、読者にはそこまでをたしかめる対象がいないのが残念ではないだろうか。

＝つづく＝

＊　＊　＊　＊